



「ちよんまげ」

司馬純詩

神は「すべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。これは人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見出すことができるようにということなのです。」(使徒言行録17章26-27節) アテネでパウロは異邦人(Gentile)にこう伝えた。

国家(State)イデオロギーが民族(Nation)性を規定する傾向がつよい現代。生活環境の中で、人はともすると「歴史と伝統の民族文化」という陥穽に落ち入る。井の中の蛙になると、人は異文化への寛容性を失う。すると異民族(Alia n)に対して、国力の対決によって問題を解決しようとする。

話は飛びますが、たとえば江戸期のちよんまげ。

時代劇に慣れ親しんでいる日本人には何の違和感もないが、これは相当に奇妙奇天烈な髪型です。頭頂部を剃り、側頭部の伸ばした髪をポニーテールに結んで、油で固めて頭上に曲げて結び、剃った月代に乗せるのである。これを奇妙と感じる感覚を麻痺させるのが、民族文化の陥穽です。わたしたちの異文化に対する驚きは、すべてこれに起因する。辮髪も纏足も、あのだじょうヒゲも中国ではちょんまげ並みに当たり前だったのです。

文化の陥穽の中で構築された民族感情が、「寛容できない」異文化と対峙したとき、国力に頼って解決しようとする。中国のことを馬鹿にする国は、敵対国である。日本のいうことを聞かない国は、とんでもない国である。だから、何とかしろ、となるのです。

日本と中国は72年の国交正常化以来、過剰に「友好」が強調される国家関係でした。中国投資、中国への支店・事務所や工場開設などもまず日中友好ありき。一時は役所さえも民間に身をやつして友好団体として交流したものです。ネットを開いたら、個人のサイトに今だに「・・・君の日中友好サイト」とありました。

友好が強調されるのは「侵略の謝罪」や「中国蔑視」がわだかまりとして残るからでしょうか。が、いずれも多分に両国国民の「文化の陥穽」からの思い込みという面もあるようです。が、いずれの政府もこれを国力対決で解決しようとするのです。

暴虐の限りを尽くした日本軍兵士を神様とする靖国神社に、首相が参拝する。これに中国では政府のトップが抗議をし、国家機関が交流をドタキャンし、政府が理念的リーダーを担って反日運動が起こる。それでいて中国政府は歴史的遺物で構築される中華思想と大国意識の上に、建前とかけ離れたえげつない経済優先主義に突き進み、対して日本は侵略の歴史を覆い隠して、天皇制神道国家体制・アメリカとその軍事に依存・経済優先構造を維持しています。

靖国という象徴は問題ですが、日本軍兵士も戦争の被害者だったことは中国人には理解され

ません。

死者を一切合財神社に祭り、首相が参拝する。これを奇妙と思わない日本人の従順さ。これはキリスト教会の活動を制約し、国際交流を阻む中国の状況とは、鏡写しのように見えます。中国13億と日本1億3千の民。民間が心を開いて、対等に付き合えば、状況のいびつさと政府の理不尽さが見えるのではないのでしょうか。

キリストは人々の「平和であり」、自らの身をもって「敵意という隔ての壁を取り壊し」た。(エフェソの信徒への手紙2章14節)日本人も中国人も、民族の歴史や文化に自負を抱きすぎ、国家に依存しすぎるように思えます。友好さえも日本では「日中」友好、中国では「中日」友好なのです。

(しば じゅんじ 所員・国際学部教授)

